

第2節 新しいライフスタイルを求めて

働きバチ社会に異常あり?
でもまだまだ長い通勤時間

職

新しい職業観の台頭

モータリ社員、働きバチなど、働きすぎの人をさす言葉も、最近あまり聞かれなくなった。どうやら、働き手の意識も変わってきたらしい。

趣味や余暇よりも、仕事に生きがいを感じるという人は34%、市民の3人に1人ともはや少数派。特に20代では18%と、50代の49%とは大きな差がある。また20代は「仕事より自分の時間」とハッキリしており、「自分の時間を犠牲にした仕事上のつきあい」に対しては43%がNO。

職業を選ぶときでも20代は特徴的で、「収入」よりも「その仕事が好き」とか、「将来性」を優先し、「会社のイメージ」を重視する。

変化の波は、終身雇用制へも押し寄せている。「一つの仕事を一生続けたほうがよい」とは思わない人は、20代から40代の男性で30%以上にもなり、また、20代男性の17%は転職を考えている。

こうした若い世代を中心とした新しい職業観に対し、中高年層の仕事志向は対照的だ。労働

省の調査では、40代以上の男性の約7割が、65歳以降もできるかぎり働きたいと考えている。ところが、市内の事業所(従業員30人以上)



市と公共職業安定所の共催の「地域雇用相談」 横浜市技能文化会館内で随時行っている「パート雇用相談」

の定年年齢は60歳が最も多く64%で、55歳から59歳も31%あり、61歳以上はわずか5%にすぎない。中高年層の半数近くが仕事を生きがいと感じていることを考えると、このギャップはちよつと気になるところである。

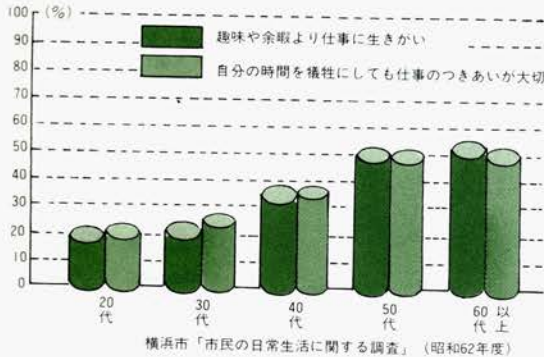
すすむ女性の社会進出 働く女性はもう珍しくない。市内の女性の労働

市 民 デ ー タ

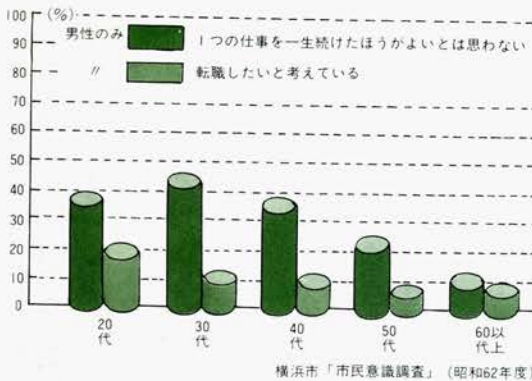
- 地位を得るより平凡な暮らしがよいと考えている人 56%
 - 家族と離れてまでも単身赴任すべきではない、という人 56%
 - 組織の秩序を守るより個性を生かすほうが大切だと思う人 24%
 - 出世や昇進がかかっていたら多少のことは耐え忍ぶ 38%
- 理想の職業ベスト3 ①自分の趣味・能力を生かせる職業 ②平凡でも収入が安定している職業 ③人を助けたり、世の中に奉仕する職業

Life Style

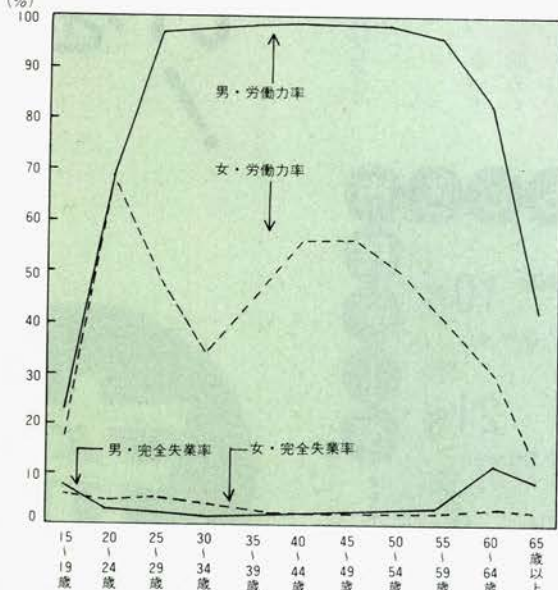
■仕事人間はもう古い？



■終身雇用に固執しない20~30代の男性



■男性は60代の失業率が高く、女性はいぜん30代前後で労働力が低下

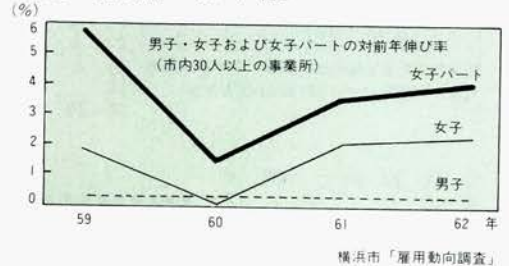


「国勢調査」(昭和60年)

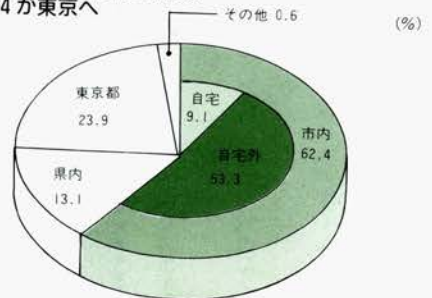
働力率はいぜんとして30代前後で低下するが、仕事をする女性の数は確実に増えている。20歳から60歳の女性のうち、フルタイムで働いている人は、27・8%、パートなどの20・3%を加えると、48・1%が何らかの形で仕事をしている。専業主婦など家事に専念している人は47・2%だから、ほんのわずかなが、働く女性が家事専念の人を上回った。当然、受け入れる社会の意識も変化をみせている。「女性も仕事をもって自立すべき」という市民は、58年の56%から62年には76%へと、増えた。一方「共働きでも家事は女性」という人も約半数。なかなか変わらない部分もある。

長い通勤時間
「お勤めはどちらですか」「はい、市内です」という人は62%。県内が13%、東京へも4分の1にあたる24%の人が働きに行っている。これに対して、職場は市内が望ましいという人は85%にものぼる。市の調査では、通勤に1時間以上かかる人は27%。望ましい通勤時間は一時間以内が91%だから、長い通勤時間にウンザリという人も多いようだ。

■進む「女子化」「パート化」



■市民の6割が市内で就業、1/4が東京へ



「国勢調査」(昭和60年)